

ミヤマヒサゴコメツキ属の2種の幼虫について

大平仁夫・大川秀雄

Hitoo ÔHIRA and Hideo OHKAWA: Notes on the larvae of two *Homotechnes*-species (Elateridae: Dendrometrinae, Hypnoidini) from Japan

Abstract: Two different larvae belonging to the genus *Homotechnes*, *H. motschulskyi fleutiauxi* from Abo-pass in Gifu Prefecture (alt. ca. 1,700 m) (Fig. 1 A-C) and *H. brunneofuscus* from Kamegamori-rindo on Kochi Prefecture in Shikoku (alt. ca. 1,100~1,600 m) (Fig. 2 A-C), are recorded. These larvae are inhabite generally under the stones and seemd to be chiefly predaceous.

The larvae are readily identified by its dark brown color on body dorsum, triangular posterior portion of fronto-clypeal area (fcl), broad and depressed dorsal plate (dpla), well developed urogomphi (ur), and vey large and quadrate caudal notch (cn) of 9th abdominal segments.

日本に分布するヒサゴコメツキ類は、ヒサゴコメツキ亜科 (Hynoidinae) のヒサゴコメツキ族 (Hypnoidini) として扱われていたが、最近ではカネコメツキ亜科 (Dendrometrinae) の中のヒサゴコメツキ族 (Hypnoidini) の1属として扱われることが多い。

ヒサゴコメツキ族の種は、日本に5属10数種記録されているが、中でもミヤマヒサゴコメツキ属の種 (*H. motschulskyi*) は下翅が短小化していて、地域ごとに形態の分化が生じているなどで、現在では50数亜種が命名記録されている。しかし、本属の幼虫の研究は殆ど進展がなく、大平 (1958, 1992) が明らかにした立山産と木曾駒ヶ岳産が知られているに過ぎない。

このたび、筆者の一人である大川が、岐阜県安房峠 (高山市側) と高知県瓶ヶ森林道で2種の幼虫を見出したのでその形態の概要を報告する。末尾に本文について指導をいただいた、名古屋大学大学院・生命農学研究科の大場裕一博士に心から感謝の意を表する。

1. *Homotechnes motschulskyi fleutiauxi* (ÔHIRA, 1960) フトミヤマヒサゴコメツキ (Fig. 1, A-C)

この安房峠産は、上高地や徳本峠や平湯温泉周辺産とともに、上記の亜種名で扱われており、成虫の体は短大で黒色、ヒサゴ型が顕著な亜種である。

安房峠 (高山市側) では、4頭の幼虫が大川によって見出された。その中のもっとも大形の1頭はここに図示した体長17 mm のほぼ終令に近いと思われる個体である (Fig. 1, A)。体背面は暗褐色で光沢を有し、頭部と胸部の3節 (Fig. 1, A: I, II, III) と第9腹節の背板は黒褐色、体腹面は淡黄褐色である。

頭部は偏平状で、前頭部 (fcl) の後方はくびれて明瞭な三角形を呈し (Fig. 1, B: fcl↑)、頭がい後背毛 (Fig. 1, B: ped) は明瞭に存在する。また、第9腹節の外形は図示 (Fig. 1, C) したようで、硬皮板 (Fig. 1, C: dpla) は偏平状を呈し、末端の urogomphus (Fig. 1, C: ur) は細長く後方に伸長し、末端部は上反して鋭くとがる。また、尾節凹陷 (Fig. 1, C: cn) は巾広く、両側は後方に弱く幅狭くなる。

調査標本: 4 exs., 安房峠 (高山市) (alt. 1,700 m), 1-VI-2009, 大川採集。

2. *Homotechnes brunneofuscus* (NAKANE, 1954) チャグロヒサゴコメツキ (Fig. 2, A-C)

この幼虫は、瓶ヶ森林道の高知県側の崖下の石の下から大川が見出した体長13 mm 内外の終令に近いと思われる個体である (Fig. 2, A)。

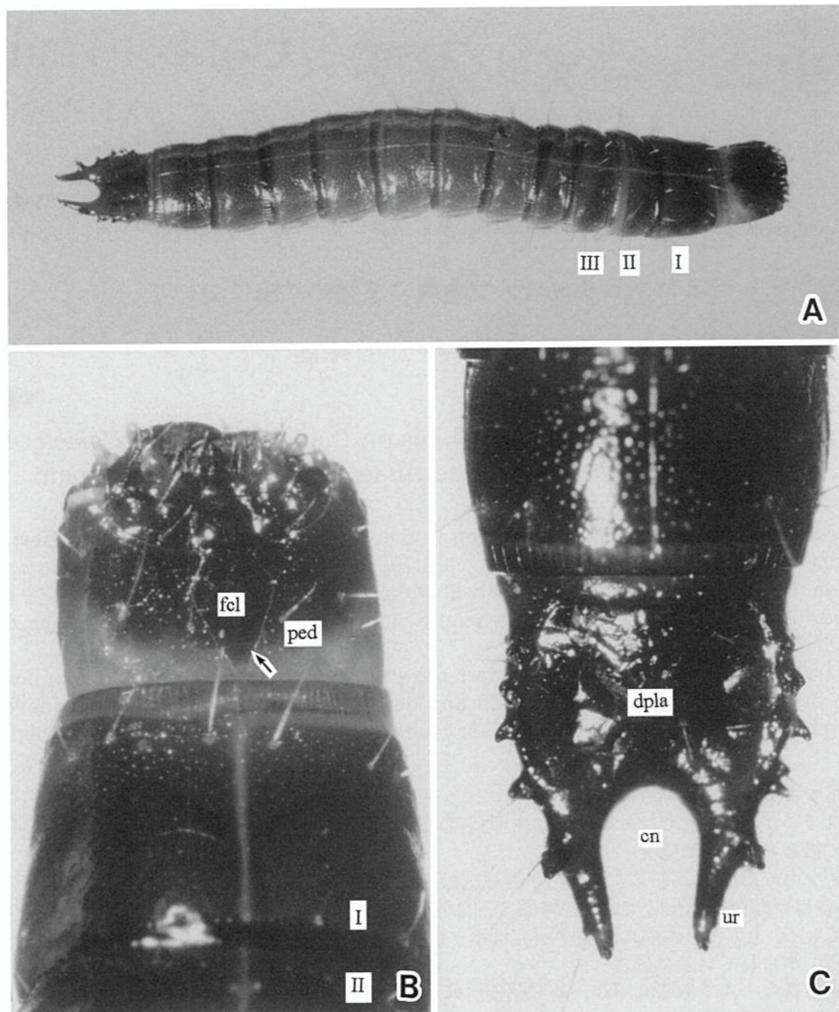


Fig. 1. A-C. *H. motschulskyi fleutiauxi* (フトミヤマヒサゴメツキ), from Abo-pass in Gifu Prefecture. A, a mature larva, body length 17 mm; B, head and pronotum, dorsal aspect; C, 8th and 9th abdominal segments, dorsal aspect.

この個体の一般形態は前種にきわめて類似しているが、体はより褐色をおびており、頭部、胸部 (Fig. 2, A: I, II, III) や腹部の背板上の点刻はより粗で密に印し、光沢はやや鈍い (Fig. 2, A)。もっとも特徴的なのは、頭部の前頭部 (Fig. 2, B: fcl↑) の後方の三角形状部が前種のように直線状の三角形ではなく、弱く外方に湾曲したやや不完全な三角形状を呈していることである。しかし、本属の主要な特徴である前頭後毛 (Fig. 2, B: ped↑) は明瞭に存在している。

第9腹節は図示 (Fig. 2, C) したようで、背板 (Fig. 2, C: dpla) は偏平状であるが、側縁の歯状突起群は細長く鋭く突出しており、最後端の1対はより顕著である。また、urogomphus (Fig. 2, C: ur) は前種と同様に後方に細長く伸長するが、末端は弱く上反してとがるのみである。その他、尾節凹陷 (Fig. 2, C: cn) は前種のように後方に狭まばらなく、弱く後方に広がる。

調査標本: 1 ex., 瓶ヶ森林道 (高知県いの町) (alt. 1,100~1,600 m), 26-V-2009, 大川採集。

その他について

ここに示した本属の2種の幼虫は、いずれも飼育して成虫を確認していないが、ミヤマヒサゴ類の特徴は明

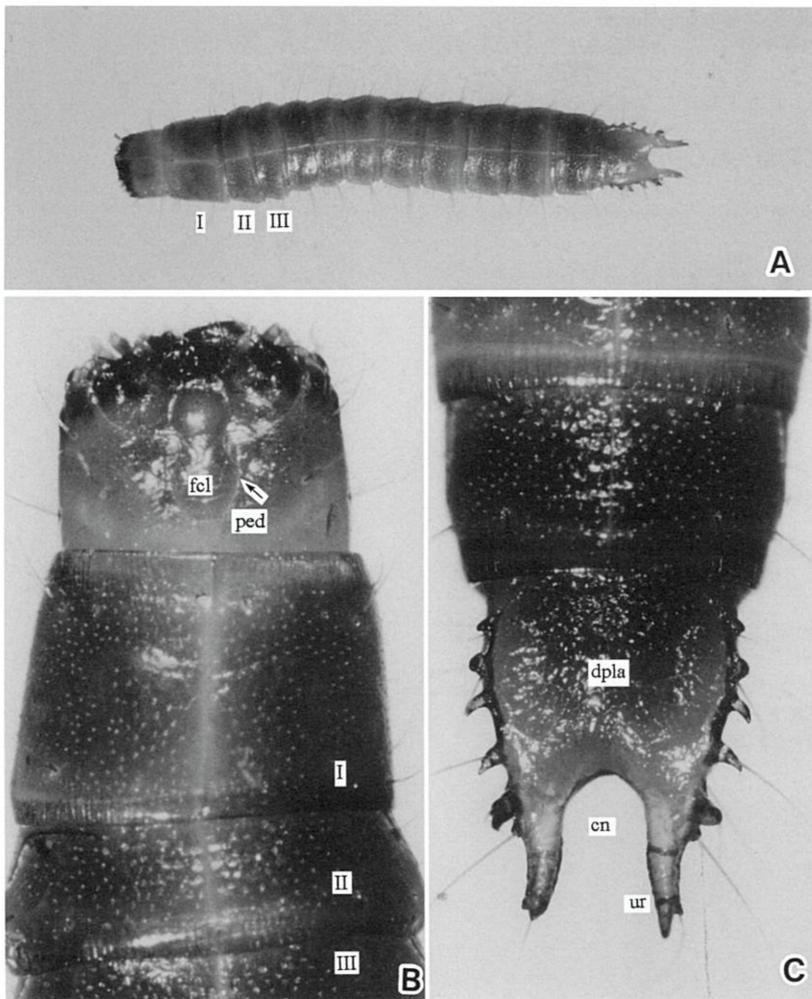


Fig. 2. A-C: *H. brunneofuscus* (チャグロヒサゴメツキ), from Kamegamori-rindo, Kochi Prefecture. A, immature larva, body length, 13 mm; B, head and thorax, dorsal aspect; C, 8th and 9th abdominal segments, dorsal aspect.

瞭で、基本的な形態はすでに明らかになっている。今後は日本各地からの個体を得て、幼虫間においても成虫のような形態上の地域変異が、どの程度生じているかに注目して調査して行きたいと考えている。また、幼虫は成虫と異なって若齢と老熟個体間や生息場所の環境の影響などを受けやすく、形態上にも変異が生じることがあるので、比較には複数以上の個体の調査が必要である。今後、分解できるものは分解して、より詳しい各部の形態を明らかにしたいと考えている。ここに示したチャグロヒサゴメツキの幼虫の一般形態からの推察では、ミヤマヒサゴメツキとはやや異質的であって、系統的には両種間でかなり異なっているように判断される。

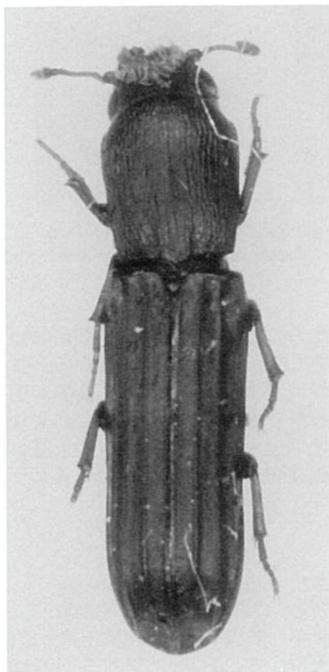
引用文献

大平仁夫, 1958. 日本産コメツキムシ科幼虫の形態に関する研究(1). *KONTYU, Tokyo*, 26: 30-32, 2 plates.
 ———, 1962. 日本産コメツキムシ科の幼虫の形態学的ならびに分類学的研究: 179 pp. 62 plates. (岡崎)
 (大平: 〒444-3511 岡崎市舞木町狐山 6-4)
 (大川: 〒326-0043 足利市助戸仲町 820-1)

○ホソカタムシ科7種の新分布記録について

以下7種のホソカタムシは新分布と思われるので報告する。

1. ノコギリホソカタムシ *Endophloeus serratus* SHARP
2 exs., 熊毛郡屋久島永田, 19. III. 2007, 向山敬延採集.
2. マダラホソカタムシ *Trachypholis variegata* (SHARP)
2 exs., 熊毛郡屋久島原, 17. V. 2003, 向山敬延採集.
3. サビマダラオオホソカタムシ *Dastarcus longulus* SHARP
2 exs., 熊毛郡屋久島原, 17. V. 2003, 向山敬延採集.
4. クロサワオオホソカタムシ *Dastarcus kuroawai* SASAJI
1 ex., 大島郡徳之島天城岳, 21. VI. 2006, 筆者採集.
天城岳登山口付近のナイターで採集.
5. ヒサゴホソカタムシ *Glyphocryptus brevicollis* SHARP
1 ex., 熊毛郡屋久島中間, 20. IV. 2004, 向山敬延採集.
6. ヒゴホソカタムシ *Cylindromicrus gracilis* SHARP (写真A)
1 ex., 八重山郡西表島古見, 17. VII. 1996.



写真A. 西表島産ヒゴホソカタムシ



写真B. 伊平屋島産セスジツツホソカタムシ

1 ex., 八重山郡西表島大富林道, 16. VII. 1996, 筆者採集.

本種は平野幸彦氏が熊本県大和町で再発見されて以来, 2, 3例目の記録となる. 古見は縦断道路入り口付近, 大富林道は西船着き場橋上のナイターで採集.

7. セスジツツホソカタムシ *Cylindromicrus hiranoi* AOKI (写真B)

1 ex., 島尻郡伊平屋島, 29. VI. 2003, 筆者採集.

腰岳林道のナイターで採集. 本種の分布はいまのところ鹿児島県, 種子島, 奄美大島, 沖縄島, 石垣島, 西表島となっている.

上記7種は青木淳一氏に同定, ご教示をしていただいた, ここに改めてお礼を申し上げる. また屋久島産の4種を提供して下さった向山敬延氏にお礼を申し上げる.

引用文献

- 青木淳一, 2009. 図鑑に載っていない日本産ホソカタムシ. *Kanagawa-Chūhō, Odawara*, (165): 1-15.
黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III). 500 pp. 保育社, 大阪.
(〒663-8002 西宮市一里山町19-18, 田中 稔)

徳之島産のコメツキムシ若干種の記録

大平 仁 夫

Hitoo ÔHIRA: Some distributional notes on the elaterid-beetles from Toku-no-shima Is. in the Ryukyu Islands, Japan

筆者はこのたび、つくば市の栗原 隆博士が2009年3月に沖縄県の徳之島で採集されたコメツキムシ類の提供をいただいたのでここに記録する。同氏の厚意に心から感謝の意を表する。なお、ここに記録した種の採集者はすべて隆本人であるので、本文中の採集者名は省略した。

1. *Cryptalaus larvatus pini* (LEWIS, 1894) フタモンウバタマコメツキ

調査標本: 1♀, 手々林道, 13-III-2009.

琉球列島には広く分布している暖地系の種である。徳之島からは ÔHIRA (1967) が最初に井之川から記録している。

2. *Lacon (Lacon) parallelus amamiensis* (ÔHIRA, 1967) アマミコガタノサビコメツキ

調査標本: 1 ex., 手々林道, 17-III-2009.

原名亜種の基準産地は G. LEWIS (1894) が札幌から記録した体長 12 mm の個体であるが、現在では本州から九州、対馬や屋久島にも分布することが知られている。

徳之島からはこれが最初の記録である。琉球列島産は一般に体長の 10 mm 以下のが多く、沖縄本島からは体長 8 mm の雄個体が見出されている。今度の徳之島産は体長 10 mm であった。

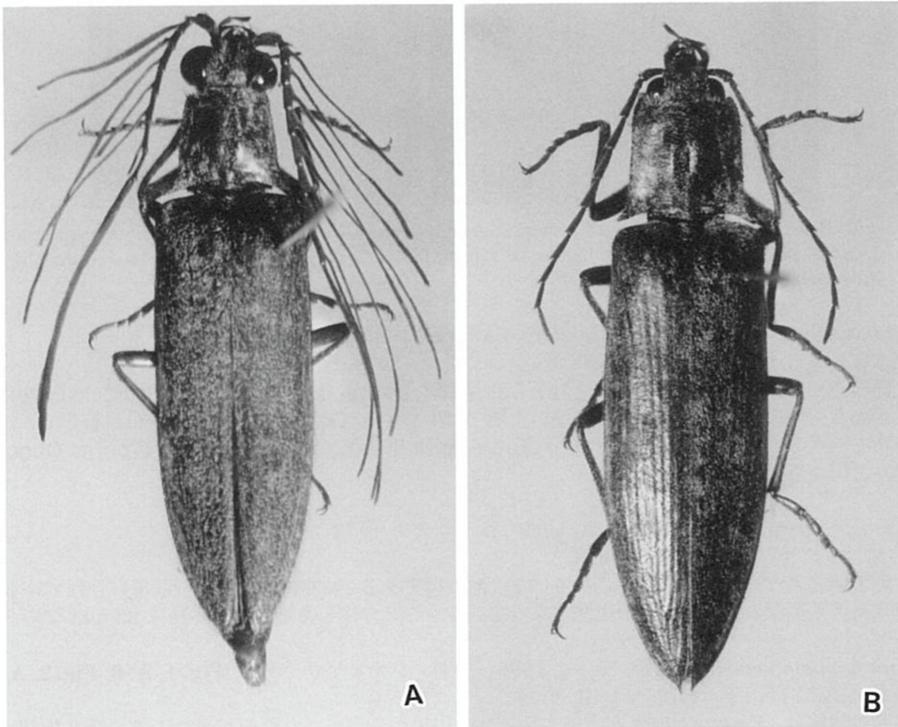


Fig. 1. A, *P. amamiinsulana ogatai*, ♂, body length 29 mm; B, ditto, ♀, body length 30 mm.

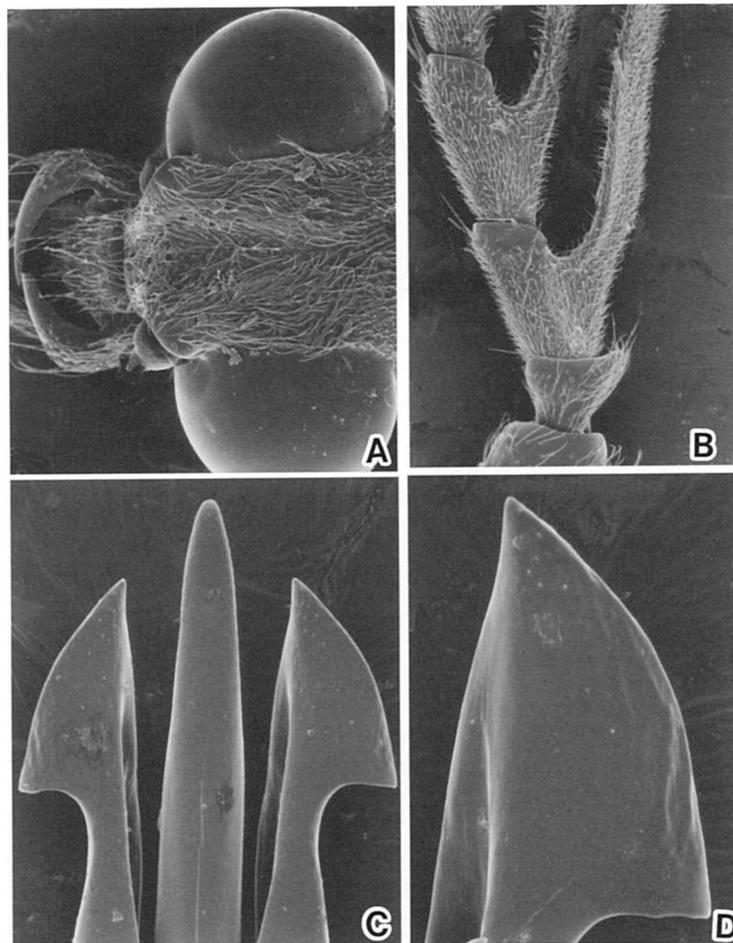


Fig. 2. A-D: *P. amamiinsulana ogatai*, ♂: A, head, dorsal aspect; B, 2nd to 4th basal segments of right antenna; C, apical portion of male genitalia, dorsal aspect, D, apical portion of left lateral lobe of male genitalia (enlarged).

3. *Agrypnus (Agrypnus) scutellaris scutellaris* CANDÈZE, 1893 シロモンサビキコリ

調査標本: 1♀, 手々林道, 13-III-2009.

奄美大島原産であるが, 原名亜種は中之島から沖縄本島(伊平屋島, 伊是名島)の範囲に分布。他に伊豆諸島の八丈島からも知られている。幼虫が畑地の土壌中に生息するため, 植物の根株などに付着して人為作用によって分布を拡大しているように思われる。八重山諸島産は別亜種にされている。徳之島からは ÔHIRA (1967) が最初に井之川から記録している。

4. *Agrypnus (Agrypnus) miyakei* ÔHIRA, 1967 ミヤケオオサビキコリ

調査標本: 1♂, 手々林道, 18-III-2009.

奄美大島と徳之島と沖縄本島から知られている大形の種であるが, 沖縄本島産は別亜種にされている。また, 徳之島産は奄美大島産の副模式標本の産地となっている。ここで検した雄個体の体長は 22 mm であった。

5. *Pectocera amamiinsulana ogatai* KISHII, 1996 トクノシマヒゲコマツキ (Fig. 1, A, B; Fig. 2, A-D)

調査標本: 12♂1♀, 手々林道, 14-III-2009.

徳之島産の個体は, KISHII (1996) が犬田布岳と井之川岳から見出されたそれぞれ 1 雄の計 2 雄個体に基づいて上記の新亜種名を付して記載したが, 原記載以降の再記録はなく, 雌は未知であった。

原記載によれば、奄美大島産に比して上翅の淡黄色毛によるスポット状の斑紋が不明瞭で、触角は明らかにより長い。また、前胸背板の正中部の縦凹溝はより深く印し、雄交尾器の側突起の末端部の三角状部の外縁はより幅広く拡大するなどとしている。しかし、今回の資料で検した限りでは、頭部 (Fig. 2, A) や触角の基部節 (Fig. 2, B) や雄交尾器の形態 (Fig. 2, C, D) などは奄美大島産の原名亜種と識別できるような特徴は見出すことができなかった。今後のさらに詳しい調査が必要と思われる。筆者がこのたびの資料で測定した 12 雄個体の体長は 23~30 mm の間にあり、雌は図示 (Fig. 1, B) した体長 30 mm の個体であった。

6. *Ampedus (Ampedus) amamiensis* ÔHIRA, 1968 アマミムネアカコメツキ

調査標本: 2♂2♀, 手々林道, 17-III-2009.

体長は 6~9 mm で、頭部と小盾板と上翅は黒色、体下面と前胸背板の一部または大部分が赤褐色をした美麗種である。春に現れ、シイや各種の花に飛来する。沖縄本島からも記録されている。徳之島からは岸井 (1989) が大田布岳から 1 雌個体を記録している。

引用文献

- LEWIS, G., 1894. On the Elateridae of Japan. *Ann. Mag. Nat. Hist.*, 13(6): 26-48.
 KISHII, T., 1973. On the Elaterid-beetles from Ryukyu Archipelago collected by Mr. Isao MATOBA. *Bull. Heian High School*, (17): 1-24, 4 plates.
 ———, 1989. 徳之島で採集された興味あるコメツキムシ。月刊むし, (217): 39-40.
 ———, 1996. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent area (14). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (39): 1-40, 8 plates.
 ÔHIRA, H., 1967. The Elateridae of the Ryukyu Archipelago, I. *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 9(3): 95-106.
 (〒444-3511 岡崎市舞木町狐山 6-4)

◇書籍紹介◇

書評「虫のフリ見て 我がフリ直せ」

新里達也

養老孟司・河野和男 著. A5判. 228頁. 2009年9月25日発行. 明石書店.

表題からしてお馴染みの養老先生の虫談義と思ってこの本を読み進めると、うれしい誤算が待っている。いや誤算では失礼であろう、著者らが仕掛けた巧妙な罠が待ち構えているのである。

本書は、「第I部 虫の目で世界を眺めて」と「第II部 生き物たちのつどう社会」の2部よりなし、養老・河野両氏の飽くことない虫談義のさきに生物の進化と日本の自然史観が熱く語られる。読者の理解を補完するにあまりのある豊富な脚注と的確なコラムも用意されている。目次を見渡せば、「人はなぜ虫を集めるのか」のようなむしろ虫屋趣味のタイトルが続き、ともすれば近著対談「虫捕る子だけが生き残る (奥本大三郎・池田清彦共著)」を彷彿させるが、内容はかなり異質である。それはもちろん、対談相手である河野和男氏存在によるところが大きい。お二人の軽妙な語り口につられてつい読み飛ばしがちになるが、ときおり見せる河野氏の鋭い突っ込みに思わずドキリとさせられ、物腰柔らかに受け答えする養老氏はけれど少しも引いてはいない。本書は虫屋の楽しい対談という一面もあるが、一本の見えない吟線のごとき緊張が全編を貫いているのである。

ところで共著者の河野氏は甲虫屋には馴染みの深い人である。名著「カブトムシと進化論: 博物学の復権」を読まれた方も多いただろうし、同書に先立ちその試論が月刊むし誌上にもたびたび掲載されてきた。ご専門は育種学であるが、カブトムシ・クワガタムシを始めとする甲虫類の国内有数のコレクターでもある。その豊かな標本を背景に展開される、カブトムシやクワガタムシ雄の多型現象における種内変異と種間変異の平行性に着目した進化理論はたいへん興味深い。

第I部の中心テーマとなる生物の進化はこの河野理論がほぼ全面に展開する。河野氏は、甲虫の多型に見られる種内変異を支配する「発生プログラム」属のような高位類分類群の「系統発生制約として強い力を持っている」という。「高位分類群は新しい発生プログラムの獲得によって生まれ、それは進化可能性の枠組みと制約をもって性格づけられる存在」と定義される。いっぽう養老氏は内部選択説に関するコラムのなかで、「進化に関わる」新しい変異を持つ遺伝子が排除されないためには、その他すべての遺伝子と「発生過程において強調できなければならない」と指摘する。外部選択よりも前に強い内部選択圧がかかるというのである。進化を(外部からの)自然選択による遺伝子頻度の変化ととらえるネオダーウィニズムとは真っ向から対峙する意見である。いっぽう、第II部のテーマである日本の自然史と文化についても、不思議と強い親和感を覚えるのは、第I部で述べられた進化という生命史と私たちの自然観が対をなすという視点で語られているからだろう。

(東京都国分寺市)

○木下富夫・虫ばかりの人生

8月30日深夜、尋常でない寝苦しさから目覚めた私は、携帯電話に残された留守録で、木下富夫さんが急逝されたことを知った。死因は心臓付近の動脈瘤破裂か血管内皮剥離と判然としていないが、苦しみに出してから心臓停止状態に陥った。ほとんど即死状態であったという。享年61歳。虫ばかりの人生を生きた木下オヤジの、それにしてもあまりにも唐突で早すぎる幕引きであった。

奇しくもオヤジの命日となったその日は、恒例の神奈川昆虫談話会の例会が箱根で開かれていた。虫友がゲストスピーカーと聞いていたうえ、久しぶりに親しい仲間と話をしたいので、私は出席するのをとても楽しみにしていた。当然ながらオヤジともビールを飲むことになるだろう。ところが、直前まで続いた会議会合の疲れがひどく、当日の昼になって急遽出かけるのを取り止めてしまったのである。そのせいか、オヤジが例会の席で突然倒れたという話は、私にはとても遠くで起きた空事には思えなかった。会場から担がれソファで寝かされたオヤジの脂汗が滲む苦しそうな顔さえも、まるで現実に見てきた光景のように眼に浮かんだのである。

思えば、オヤジと始めて会ったのは御岳山の尾根筋だった。それは30年以上も前であるにもかかわらず、不思議と鮮明に覚えている。晴天の8月初めの日曜日であった。満開のノリウツギでヒメヨツズジハナカミキリを採っていた私は、当時30歳そこそこであろうオヤジに声をかけられた。昨日この近くでソボリンゴカミキリらしきものを採ったこと、日原で先週パチビドニアを採ったことなど話してくれた。浅学無知の私はソボリンゴが関東地方で採れることや、ましてパチビドニアというパチンコのような名前の虫は知らなかったの、ただただ恐れ入るばかりであった。後日、なぞの虫はパキビドニア *Pachypidonia* = ヒゲブトハナカミキリの異読であることに気づいたが、その時代、本種がカミキリ屋の垂涎的であったことはいうまでもない。

オヤジは第一印象からして正しく採集の名人であった。虫屋は何を差し置いても珍品をたくさん採ることが一番エライのであるから、採集がヘタクソと誇られる私にとっては、いつまでたっても雲の上の先生であった。

そのオヤジの最大かつ象徴的な功績はやはり、珍品の誉れ高いオオトラカミキリの採集に止めを刺すだろう。もとよりその解明にはほかのカミキリ屋諸兄も関わったはずであろうが、この際ケチなことは言うものでない。「オヤジといえばオオトラ」、何とも語呂合わせがよいから、それでいいのだ。私もその恩恵に預かり、たしか学位授与の記念にと秘蔵の産地のワンペアを直々に頂戴したことがある。その祝いの席で、治療中とはいえ前歯全部がすっかり抜けたオヤジは、私とカミさんに向かって猛烈につばきを飛ばしながら激励の言葉を述べられた。私の肩を揺さぶりながら熱く語りかけていた、あの酔いど



写真 ブナの立枯れでセアカハナカミキリを採った直後の木下富夫さん。2009年8月2日、群馬県武尊山。伊藤寿彦撮影。

れ顔が忘れられない。

今年の正月にオヤジから来た年賀状には、踊るような筆跡で「群馬のアメイロやろうな！」と書いてあった。数年前に群馬県上野村で採集されたエゾアメイロカミキリのことである。本種はロシア沿海州から記載され、日本では道東から1980年代初めに記録された。それが最近になって本州中部で発見されたのである。これまで堀口徹が夜間採集の幕に飛来した2個体を採集しているだけで、その後、追加個体を狙って同地を訪れた私たちはことごとく機を外したのであった。この仲間の幼虫はトネリコ類を食べることが知られている。私たちは万全の体制を整えて、上野村の谷筋に自生するトネリコ属のシオジに狙いを定め、幼虫採集で多数の標本を得ようと目論んだのであった。今年の5月中旬、総勢6名で上野村に乗り込んだ私たちは本種の再発見に鋭意努めたのであるが、残念ながら結果は完敗。エゾアメイロであろうと後生大事に持ち帰った食害材からは、似ても似つかないフタモンアラゲカミキリが次々に羽化してきたのである。当然のことながらオヤジは悔しがった。この7月1日に、とある祝賀会で会った折には、来年こそは必ず雪辱を果たすと約束してくれたが、それもはやかなわぬ夢となってしまった。

陽は山影に沈もうとしていた。風は凪いで夕闇がすぐそこまで迫りつつあった。遠くの杉林から残夏を惜しむように蝉時雨が聞こえていた。あのとき天上に召されるオヤジは、不謹慎にも束の間の殺生を楽しんだのではないか。季節はまさに大好きなオオトラカミキリに頃合である。オヤジは身軽になった体を樅の樹冠に漂わせながら、ほどなく特大の雄を仕留めたに違いない。そして、ひときわ高くそびえる梢にどっかと胡坐をかくと、したり顔で下界を見下ろしていたのである。

(東京都国分寺市、新里 達也)

北海道渡島半島におけるキボシツブゲンゴロウの採集記録

岡田 亮平

Collecting records of *Japanolaccophilus nipponensis* in
Oshima Peninsula, Hokkaido

Ryohei OKADA

キボシツブゲンゴロウ *Japanolaccophilus nipponensis* (KAMIYA) は、ゲンゴロウ科 Dytiscidae ツブゲンゴロウ亜科 Laccophilinae キボシツブゲンゴロウ属 *Japanolaccophilus* に属する 1 属 1 種で、日本固有種である(森・北山, 2002)。本種の分布は局地的であり、北海道では道北の豊富町、道東の美幌町と白糠町、および道南の黒松内町で記録があるもの(堀ら, 1999; 山川, 2004; 藤原ら, 2007)、現在までに知られている産地は極めて少ない。

筆者は、従来記録のなかった道南の渡島半島(黒松内低湿地帯以南)にて、本種を多数採集しているので報告する。

- 8 exs., 渡島支庁長万部町 国縫川支流茶屋川, 12. X. 2008 (Fig. 1)
 - 2 exs., 渡島支庁長万部町 茂訓縫川, 21. V. 2009
 - 3 exs., 檜山支庁今金町 後志利別川支流珍古辺川, 12. X. 2008
 - 4 exs., 檜山支庁今金町 後志利別川支流下ハカイマップ川, 12. X. 2008
 - 4 exs., 渡島支庁北斗市 流溪川支流細小股沢川, 13. IX. 2007
 - 7 exs., 渡島支庁北斗市 流溪川支流万太郎沢川, 19. VI. 2007
 - 1 ex., 渡島支庁北斗市 茂辺地川支流東股川, 18. V. 2008
 - 3 exs., 渡島支庁木古内町 大釜谷川, 4. X. 2008
 - 2 exs., 渡島支庁木古内町 大平川, 4. V. 2009
 - 1 ex., 渡島支庁知内町 知内川支流中東菜川, 22. V. 2008
 - 4 exs., 渡島支庁知内町 知内川支流チリチリ川, 15. VI. 2008
 - 3 exs., 渡島支庁知内町 知内川支流ミナゴヤ川, 15. VI. 2008
- 全て筆者採集・保管。

本種の採集地を Fig. 2 に示す。本種が採集された河川は、いずれも山間部から平野部の広葉樹林帯を流れる小規模な清流で、河川区分は Aa—Bb 域移行型であった。筆者は本種を採集した河川を含め、渡島半島の計 63 河川(支流を除く)で採集を試みたが、本種が採集されたのは川幅 3 m 以下の細流がほとんどで、河川規模の大きな本流からは得られなかった。また、同じ流水性ゲンゴロウであるゴマダラチビゲンゴロウ *Oreodytes natrix* やシマチビゲンゴロウ *Nebrioporus simplicipes* が河川の平瀬の石の下でも採集されるのに対し、本種がこのような環境から採集されることはなく、本種は流れが緩く水深が深い淵、木の根の下やオーバーハングした川縁の下、および淵に沈んだ流木の下からのみ採集された。また本種が採集された河川では、多くの場合エゾイワナやヤマメの生息も確認され、本種は極めて自然度の高い環境にのみ生息すると考えられる。

環境省のレッドデータブックでは、国内産ゲンゴロウのうち 20 種が絶滅危惧 I 類 (I)、絶滅危惧 II 類 (II)、準絶滅危惧 (NT) として掲載されており、キボシツブゲンゴロウは準絶滅危惧に指定されている



Fig. 1

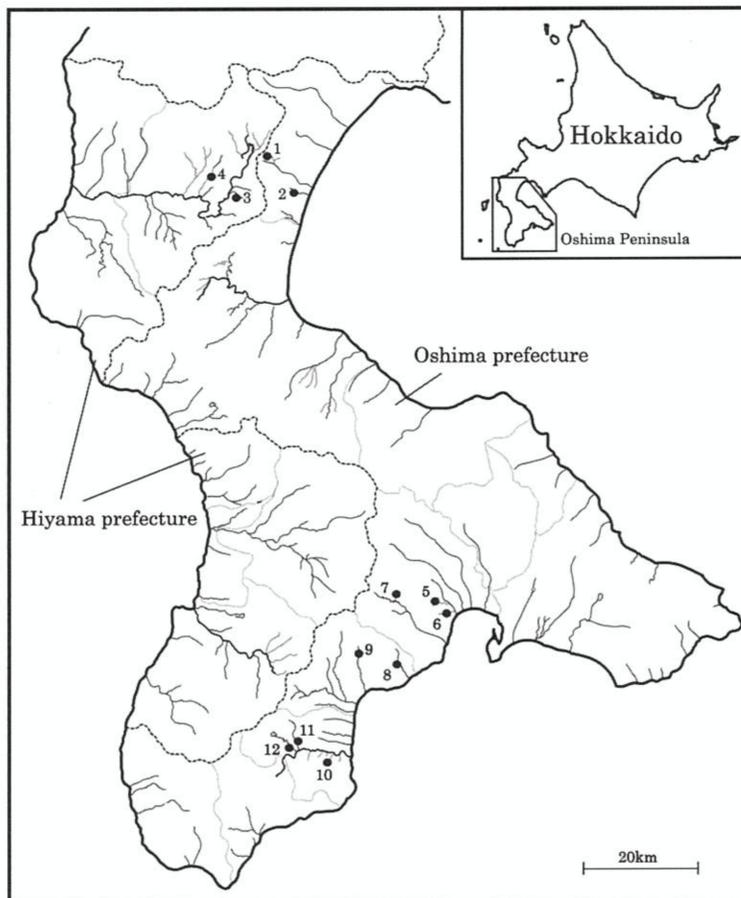


Fig. 2. 採集地 (Localities of *Japanolaccophilus nipponensis* in Oshima Peninsula, Hokkaido. 1, Chaya riv.; 2, Mokunnui riv.; 3, Chinkobe riv.; 4, Shimohakaimappu riv.; 5, Hosokomatazawa riv.; 6, Manntarozawa riv.; 7, Higashimata riv.; 8, Okamaya riv.; 9, Ohira riv.; 10, Higashinakana riv.; 11, Chirichiri riv.; 12, Minagoya riv.)

(環境省, 2006). さらに, これら 20 種のうち, 河川に生息すると考えられるゲンゴロウは本種を含め 2 種のみである. また, 本種は北海道のレッドデータブックにおいても希少種 (R) に指定されており, 本種の生息地が環境の変化を受けやすい細流であることから, 本種の生息環境の保全には十分注意を払う必要がある. そのため, 今後は分布調査を継続して行なうことに加え, 本種の生態の解明にも努めていきたいと考えている.

末筆ながら, 本種の生息環境および採集方法についてご教示頂き, 本稿をご校閲して頂いた吉富博之氏に深く感謝申し上げます.

参考文献

- 藤原淳一・吉田峰規, 2007. 道東で採集した注目すべき水生甲虫 2 種の記録, 月刊むし, (431): 45.
 堀 繁久・上手雄貴・川原 進, 1999. キボシツブゲンゴロウ *Japanolaccophilus nipponensis* (KAMIYA) の道東からの記録 (Dytiscidae, Coleoptera), *Jezoensis*, (26): 101.
 環境省, 2006. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—5 昆虫類: 181.
 森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 231 pp. 文一総合出版.
 山川雄大, 2004. 北海道黒松内町からキボシツブゲンゴロウを記録, 月刊むし, (397): 42-43.

(〒041-8611 北海道函館市港町 3-1-1 北大水産院魚類体系学教室)

茨城県におけるバッキンガムカギアシゾウムシの採集例

吉 武 啓

ゾウムシ科カギアシゾウムシ亜科に属するバッキンガムカギアシゾウムシ *Bagous buckinghami* (写真1) は、O'BRIEN & MORIMOTO (1994) によって記載された種である。近似種が多いため種レベルでの同定が困難な日本産カギアシゾウムシ属にあって、顕著に細長い体を有する本種は同定が大変容易である。

O'BRIEN & MORIMOTO (1994) によると、*B. buckinghami* の寄主は浮葉植物の1種であるガガブタ *Nymphoides indica* (L.) KUNTZE (ミツガシワ科) で、その葉柄内部から蛹が採集されたと言う。また、本種は、その記載時に本州(千葉県, 愛知県, 京都府, 兵庫県)および九州(宮崎県), ベトナムから記録されているが、それ以降は兵庫県における採集例(沢田, 2002)以外に追加記録はないようである。

最近、筆者は茨城県において *B. buckinghami* を採集する機会に恵まれた。本種の分布を知る上で重要な記録と思われるので、若干の生態的知見と共にここに報告する。

11頭, 茨城県かすみがうら市中志筑, 標高20m, 20.vi.2009, 吉武 啓・中原直子採集(農環研所蔵昆虫標本番号24-0465107~24-0465117); 15頭, 同地, 4.vii.2009, 吉武 啓・Steve R. DAVIS 採集(農環研所蔵昆虫標本番号24-0465092~24-0465106)。

採集地(写真2)は良好なガガブタ群落がある農業用貯水池である。筆者が訪れた2009年6月下旬と7月上旬には、水面に浮かんだガガブタ葉上に多数の *B. buckinghami* の成虫が見られ(写真3)、活発に歩き回る様子や摂食・交尾行動を確認できた。また、成虫は水に濡れることを全く厭わず、水際で摂食したり、植物体を伝って水中を移動したりしていた。試みに何個体か水面に落として見たが、イネミズゾウムシなどに比べると水泳達者とはお世辞にも言えず、むしろ陸生ゾウムシ同様、もがきながら前進して何とか漂流物にしがみつくのが精一杯、という感じであり、*Bagous limosus* (GYLLENHAL, 1827) や *B. cavifrons* LECONTE, 1876, *B. americanus* LECONTE, 1876 で報告されているような水面直下を犬掻き("dog-paddle" style)で泳ぐ行動(ANGUS, 1966; MEINER, 1970; O'BRIEN & MARSHALL, 1979)は観察できなかった。O'BRIEN & MARSHALL (1979)は「水面直下の犬掻き」がカギアシゾウムシ類の典型的な水泳行動と述べているが、沈水植物ではなく、水面を覆うように群落を形成する浮葉植物を寄主利用する種の中には、本種のように泳



写真1. バッキンガムカギアシゾウムシ。



写真2. 生息環境(茨城県かすみがうら市)。



写真3. ガガブタの葉上を歩行中の成虫。

ぎ下手なものが少なからず存在するのも知れない。*Bagous buckinghami*の寄主植物であるガガブタは、環境省RDB準絶滅危惧(N.T)、茨城県RDB危急種に指定されており、他の水生植物と同様に国内各地で保全活動が行われている。一方、沢田(2002)が*B. buckinghami*と共にカギアシゾウムシ属の不明種をガガブタから得ているように、ガガブタ依存の植食性昆虫相が十分に解明されているとは言い難いのが現状である。今後、ガガブタとその関連昆虫に対する包括的な保全対策を可能にするために、ガガブタ群落における昆虫相調査を各地で行う必要があるだろう。

引用文献

- ANGUS, R. B., 1966. A note on the swimming of *Bagous limosus* (GYLLENHAL) (Coleoptera: Curculionidae). *Entomologist's Monthly Magazine*, **101**: 202.
- MEINER, J. J., 1970. Modalite nataitoir chez *Bagous limosus* GYLLENHAL (Coleoptera: Curculionidae). *Comptes rendus hebdomadaires des Séances de l'Académie, série D, Sciences Naturelles*, **270**: 1138-1140.
- O'BRIEN, C. W. & G. B. MARSHALL, 1979. U.S. *Bagous*, bionomic notes, a new species, and a new name (Bagoiini, Eirrhiniinae, Curculionidae, Coleoptera). *The Southwestern Entomologists*, **4**: 141-149.
- O'BRIEN, C. W. & K. MORIMOTO, 1994. Systematics and evolution of weevils of the genus *Bagous* GERMAR (Coleoptera: Curculionidae) II. Taxonomic treatment of the species of Japan. *Esakia*, (34): 1-74.
- 沢田佳久, 2002. 青野ヶ原のカギアシゾウム類. <http://www.geocities.jp/natureland7869/bagous/bagous.htm>
(農業環境技術研究所)

○福岡県におけるムツボシマルハナノミの採集記録

近年, YOSHITOMI (2005) によって日本産マルハナノミ科の概要がまとめられ, 64種が報告された。これによると, ムツボシマルハナノミ *Prionocyphon sexmaculatus* LEWIS は北海道から屋久島に至るまでの広範囲に分布する。本種は, 鮮やかな橙色に黒紋を呈する顕著な種として知られているが, 全国的にみて記録が少ない。九州も例外ではなく, これまで本土では大分県のみで確認されているようである(三宅武氏私信)。

筆者は福岡県で採集された本種を検する機会に恵まれたので, 以下に報告しておきたい。

1♀, 福岡県田川郡添田町英彦山(標高640m地

点), 19-27.V.2008, 三田敏治・佐藤信輔採集・筆者保管。

本個体は九州大学農学部付属彦山生物学実験施設周辺におけるマレーズトラップで得られた。このトラップは2008年4月から10月まで設置され, およそ1週間ごとに回収された。継続的な調査で得られた甲虫類の大部分は筆者が検したが, 本種は1個体のみで, 当地においての個体数はかなり少ないようである。

トラップ設置場所は, 片側を群生するササに囲まれており, もう片面は開けた草地となっている。なお, 付近にはヤブツバキやヤブニッケイ, シイ等の照葉樹が自生しているほか, クリ等も植樹されている。

末筆になるが, 貴重な資料を提供して下さった三田敏治氏, 佐藤信輔氏(九州大学), 分布についてご教示して下さい下さった三宅武氏(大分昆虫同好会)に厚くお礼申し上げます。また, 本報の校閲をして下さった丸山宗利博士(九州大学総合博物館)にも謝意を表す。

参考文献

- 羽田孝吉, 2009. 傾山系における甲虫2種の採集記録。二豊のむし, (47): 102.
- 高橋泰美, 2007. 岩手県のムツボシマルハナノミの記録。月刊むし, (431): 47.
- 吉田貴大・安達誠文, 2007. 西日本におけるムツボシマルハナノミの採集記録。月刊むし, (450): 59-60.
- YOSHITOMI, H., 2005. Systematic revision of the family Scirtidae of Japan, with phylogeny, morphology and bionomics (Insecta: Coleoptera, Scirtoidea). *Jpn. J. syst. Ent. Monog. Ser.* **3**: 1-212.

(九州大学農学部, 山本周平)



キスジツツホソミツギリゾウムシの追加記録と生態的知見

吉武 啓・榎原 寛・久保田義則

キスジツツホソミツギリゾウムシ *Callipareius (Callipareius) miyakawai* は、MORIMOTO (1979) によって伊豆諸島三宅島産の標本に基づいて記載された種であり、近似のアカツツホソミツギリゾウムシとは触角の第9・10節が幅広く、吻が長くて扁平なことで容易に区別できる。珍種の多い日本産ミツギリゾウムシ科の中でも本種は極めて稀で、原記載以降の記録はほとんどなく、森本 (2008) は“三宅島の阿古と南東林道で1978年5月に採集された5頭で記載したもので、宮川氏と大熊氏はその後これらを採集した枯れ木を含めて14回に及ぶ採集で努力したが採れていない”と述べている。最近、筆者らは本種の標本を検査する機会に恵まれただけでなく、生態的知見を得ることができたので、貴重な記録としてここに報告する。

3頭、東京都三宅島火の山林道上部、北緯34°05′45″3、東経139°32′55″5、標高250 m、27. iv.-2. vi. 2005、榎原採集、吉武保管 (写真1)；13頭、鹿児島県屋久島トイモ岳、xii. 2004、久保田材採取、18. xii. 2004-4. i. 2005、羽化脱出/割り出し、吉武保管。

三宅島産に関しては、2頭は吊り下げ式黄色トラップによって、1頭は同黒色トラップによって得られたも



1



2



3



4

- 写真1. キスジツツホソミツギリゾウムシ。
 写真2. 三宅島における生息環境 (火の山林道上部)。
 写真3. 屋久島における生息環境 (トイモ岳中腹)。
 写真4. トキワガキ枯木上の成虫 (屋久島産)。

のである。採集地はスタジイとタブの優先する森林地帯であり、当時は雄山の噴火による火山ガスの影響で全ての樹木が枯死寸前の状態にあった(写真 2)。吊り下げ式トラップは、誘引剤として 50% エタノール溶液 30 cc を入れた上で、木々の間に紐を渡して地上 1 m に設置した。なお、現在では採集地の樹木は完全に死滅してしまったことを付記しておく。屋久島産は、南東部のトイモ岳中腹(標高約 200 m 地点)の椎が優先する広葉樹林内(写真 3)で採取したトキワガキ *Diospyros morrisiana* HANCE (カキノキ科)の枯木より羽化脱出した個体または割り出した個体(写真 4)であり、同材からは検視標本の他にも数十頭が羽化脱出している(久保田, 2006)。

今回、屋久島においてキスジツホソミツギリゾウムシがトキワガキを寄主植物とすることが初めて確認されたが、本種が複数樹種を寄主利用する可能性も十分ある。本種の分布や生態を解明するためにさらなる調査が望まれる。

末筆ながら、植物を同定して下さった田金秀一郎氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

久保田義則, 2006. キスジツホソミツギリゾウムシの採集記録. *SATSUMA*, 56 (135): 126-128.

MORIMOTO, K. 1979. Descriptions of two new species of the family Brentidae (Coleoptera). *Esakia*, (14): 25-30.

森本 桂, 2008. ミツギリゾウムシ科研究入門(1). 月刊むし, (443): 4-16.

(吉武: 農業環境技術研究所)

(槇原: 森林総合研究所)

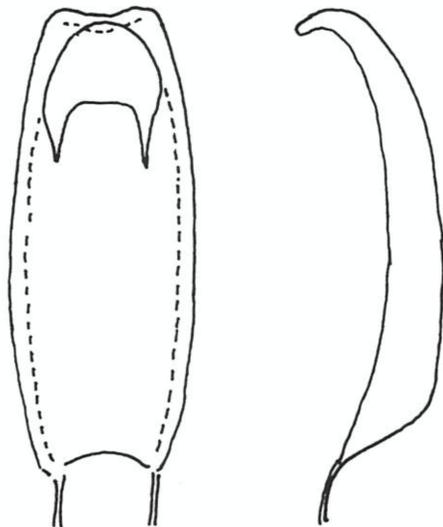
(久保田: 鹿児島県屋久島町)

○コブヒメゾウムシの佐賀県における記録

コブヒメゾウムシ *Pharcidobaris miyamotoi* MORIMOTO & YOSHIHARA は福岡県古処山で宮本正一博士によって採集された唯一頭の雌の標本を基に、1996 年に新属新種として記載されたものである。極めて稀な種の様で、その後本州から 1 例が採集されている。尚、本州の採集例はウェブ上で県名だけが公表されている。筆者は佐賀県の離島において本種の雄を採集したので写真と雄交尾器の図と共に記録しておく。

1♂, 佐賀県唐津市高島, 10. V. 2009, 城戸克弥採集・保管。

高島は、唐津市の北 3km の洋上にある周囲 3 km、標高 170 m の台形型の小島で、中腹から上はマテ



バシイの森林となっている。その森林の中で叩き網を使って採集したが、ホストは不明。末筆ながら、本州の記録についてご教示下さった伊澤和義・的場績の両氏に心から感謝申し上げます。

引用文献

MORIMOTO, K. & K. YOSHIHARA, 1996. On the Genera of the Oriental Baridinae (Coleoptera, Curculionidae). *Esakia*, (36): 1-59.

(福岡県大野城市, 城戸克弥)

沖縄島の河川における水生甲虫相

林 成多・藤原淳一・上手雄貴

Lotic and riparian Coleoptera of Okinawa-jima, Ryukyu, Japan

Masakazu HAYASHI, Jun'ichi FUJIWARA and Yuuki KAMITE

沖縄島の河川に生息する水生甲虫類は、佐藤(2003)によってまとめられている。しかしながら島内の個々の河川における分布状況についてはまとまった資料がなく、開発による生息地減少の現状など、保全のために必要な情報はきわめて不十分である。沖縄県版のレッドデータブック(RDB)によると、オキナワオオミズスマシやオキナワマルヒラタドROMシが「未決定種」として掲載されている(沖縄県, 2005)。RDBは行政による野生生物保全の基礎資料となり、ときには採集規制の根拠ともなることから、よりの確なランク指定のための情報の蓄積や掘り起こしが不可欠である。

筆者らはこれまで沖縄島の河川での調査を行ってきた。調査地は筆者らの居住地から遠方にあるため、限られた地域・日程での調査となり、得られる種も当然限られてくる。しかし、普通種を含め多くの種の記録がほとんど公表されていないことから、この機会に、過去の文献記録も含めてまとめてみることにした。今後の調査研究のための基礎的な資料となれば幸いである。

各種の記録

本報告では、幼生期または成虫期において、河川の流水中や水面、川辺に生息する種を対象とした。また、水の浸みだしや流水のしぶきによって濡れた岩盤に生息する種も含めた。ただしハネカクシ科については、筆者らの専門外であることから除外している。記録は以下のように区分した。

【文献記録】文献の記録を3つに区分した: **、原記載に掲載されているもの。ホロタイプまたはタイプ・シリーズの産地として沖縄島を含む文献; *, 採集データが掲載されている文献; 印がないものは図鑑・目録・チェックリストなどで沖縄島が分布として掲載されている文献。

【採集記録】筆者らの未公表の記録を収録した。同じ地点や採集者が重複するデータについては、適宜省略をした。なお、採集者が筆者らの場合は以下の省略形とした: MH(林), JF(藤原), YK(上手)。

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

1. フタキボシケンゲンゴロウ *Allopachria bimaculata* (M. SATO, 1972)

【文献記録】SATO, (1972)**; 佐藤(1985, 1998, 2003); 大桃・高橋(2007)*。

【採集記録】7 exs., 国頭村大国林道比地川上流, 9. ii. 2002, MH leg.; 2 exs., 比地川上流, 11. ix. 2005, MH leg.; 3 exs., 名護市源河源河大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 4 exs., 名護市三原三原福地川, 13. iii. 2009, JF leg.

ミズスマシ科 Gyrinidae

2. オキナワオオミズスマシ *Dineutus mellyi insularis* REGIMBART, 1907

【文献記録】佐藤(1977, 1985, 1998, 2003); 松井(1990)*; 大桃・高橋(2007)*。沖縄県版RDB掲載種。

【採集記録】14 exs., 大宜味村饒波川, 27. iii. 2001, MH leg.; 10 exs., 饒波川, 21. v. 2005, MH leg.; 1 ex., 名護市源河源河大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 4 exs., 国頭村宇良川, 12. iii. 2009, JF leg.; 10 exs., 名護市三原ゲーヤ川, 13. iii. 2009, JF leg.; 6 exs., 大宜味村饒波, 17. v. 2007, YK leg.; 1 ex., 名護市源河源河大川, 16. v. 2007, YK leg.

ダルマガムシ科 Hydraenidae

3. オキナワダルマガムシ *Hydraena okinawaensis* JÄCH et DIAZ, 1999

【文献記録】JÄCH and DIAZ (1999)**; 佐藤(2003)。

4. サウタケダルマガムシ(リュウキュウダルマガムシ) *Hydraena sautakei* JÄCH et DIAZ, 1999

【文献記録】JÄCH and DIAZ (1999)**; 佐藤(2003); 大桃・高橋(2007)*。

5. オキナワミジンダルマガムシ *Limnebius nakanei okinawaensis* JÄCH et MATSUI, 1994

【文献記録】JÄCH and MATSUI (1994)**; 佐藤(1998, 2003); 大桃・高橋(2007)*。

【採集記録】2 exs., 名護市源河源河川, 11. iii. 2009, JF leg.; 33 exs., 名護市源河源河大川, 16. v. 2007, YK leg.

6. アマミセスジダルマガムシ *Ochthebius amami* YOSHITOMI et M. SATO, 2001

【文献記録】YOSHITOMI and NAKAJIMA (2005)*.

【採集記録】4 exs., 国頭村宇良川, 12. iii. 2009, JF leg.; 3 exs., 国頭村佐手川下流, 12. iii. 2009, JF leg.

ガムシ科 Hydrophilidae

7. クロシオガムシ *Horelophopsis hanseni* M. SATO et YOSHITOMI, 2004

【文献記録】SATO and YOSHITOMI (2004)**. 河口部に生息することが知られている.

8. オキナワシジミガムシ *Laccobius nakanei* GENTILI, 1982

【文献記録】GENTILI (1982)**; 松井 (1990, 1991)*; 佐藤 (1998, 2003); 上手 (2007); 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】4 exs., 名護市源河源河川, 11. iii. 2009, JF leg.; 4 exs., 国頭村佐手川下流, 2. iii. 2009, JF leg.; 5 exs., 国頭村半地比地川下流, 12. iii. 2009, JF leg.; 124 exs., 名護市源河源河大川, 16. v. 2007, YK leg.; 17 exs., Taira, Nago City, 1. vi. 2000, Y. SUGIURA leg.

9. リュウキュウツヤヒラタガムシ *Agraphydrus ryukyuensis* (MATSUI, 1994)

= リュウキュウチビヒラタガムシ *Enochrus ryukyuensis* MATSUI

【文献記録】MATSUI (1994)**; 佐藤 (1998, 2003); 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】1 ex., 名護市源河源河大川, 16. v. 2007, YK leg.

10. オキナワマルチビガムシ *Pelthydrus okinawanus* NAKANE, 1982

【文献記録】NAKANE (1982)**; 佐藤 (2003); 大桃・高橋 (2007)*; 藤原・山下 (2009)*.

マルハナノミ科 Scirtidae

11. ケシマルハナノミ *Hydorocyphon satoi* YOSHITOMI, 2001

【文献記録】YOSHITOMI (2005)*.

12. ニッポンチビマルハナノミ *Cyphon nipponicus* YOSHITOMI, 2005

【文献記録】Yoshitomi (2005)**.

ヒラタドROMシ科 Psephenidae

13. キムラマルヒラタドROMシ (オオシマルヒラタドROMシの亜種) *Eubrianax amamiensis kimurai* LEE, YANG et M. SATO, 2001

【文献記録】LEE et al. (2001)**; 吉富・佐藤 (2003); 林 (2009)*

14. オキナワマルヒラタドROMシ *Eubrianax lochooensis* NAKANE, 1952

【文献記録】NAKANE (1952)**; SATO (1965, 1976)*; 佐藤 (1985); 吉富・佐藤 (2003); 林 (2009)*. 沖縄県版 RDB 掲載種. 上流域に生息するキムラマルヒラタドROMシと異なり, 中・下流の泥質分の多い環境に生息する.

15. オキナワチビマルヒゲナガハナノミ *Macroebria okinawana* LEE, YANG et M. SATO, 1997

【文献記録】LEE et al. (1997)**; 吉富・佐藤 (2003); 林・中島 (2007)*; 林 (2009)*.

ナガドROMシ科 Heteroceridae

16. タテスジナガドROMシ *Heterocerus fenestratus* THUNBERG, 1784

【文献記録】佐藤 (1985).

ナガハナノミ科 Ptilodactylidae

17. エダヒゲナガハナノミ沖繩島亜種 *Ephilichas falbellatus okinawaensis* M. SATO, 1968

【文献記録】M. SATO (1968**, 1983); 佐藤 (1985).

ドROMシ科 Dryopidae

18. リュウキュウムナビロツヤドROMシ (ムナビロツヤドROMシの亜種) *Elmomorphus brevicornis amamiensis* NOMURA, 1959

【文献記録】SATO (1965*, 1977a); 佐藤 (1985, 1998, 2003); 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】5 exs., 名護市源河源河大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 9 exs., 名護市大浦大浦川, 13. iii. 2009, JF; ; 1 ex., 名護市三原ゲヤ川, 13. iii. 2009, JF leg.; 7 exs., 名護市三原三原福地川, 13. iii. 2009, JF leg.; 2 exs., 名護市源河源河大川上流, 14. iii. 2009, JF leg.; 3 exs., 名護市源河源河大川, 16. v. 2007, YK leg.; 2 exs., 名護市大川大浦川, 18. v. 2007, YK leg.

ヒメドロムシ科 Elmidae

19. アカハラアシナガミゾドロムシ *Stenelmis hisamatsui* M. SATO, 1960

【文献記録】SATO (1965*, 1977b); 佐藤 (1985, 1998, 2003); 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】41 exs., 国頭村佐手川下流, 22. v. 2005, MH leg.; 9 exs., 東村宇出那覇, 19-22. v. 2005, MH leg.; 15 exs., 東村古島川上流, 15. xi. 2006, 萩原一貴 leg.; 1 ex., 古島川下流, 15. xi. 2006, 萩原 leg.; 4 exs., 古島川上流, 14. ii. 2007, 萩原 leg.; 3 exs., 大宜味村平南川上流, 16. xi. 2006, 萩原 leg.; 22 exs., 平南川中流, 16. xi. 2006, 萩原 leg.; 1 ex., 平南川下流, 16. xi. 2006, 萩原 leg.; 2 exs., 平南川中流, 14. ii. 2007, 萩原 leg.; 2 exs., 平南川下流, 14. ii. 2007, 萩原 leg.; 11 exs., 恩納村志嘉座川上流, 24. xi. 2006, 萩原 leg.; 6 exs., 恩納村志嘉座川中流, 24. xi. 2006, 萩原 leg.; 2 exs., 恩納村志嘉座川下流, 24. xi. 2006, 萩原 leg.; 1 ex., 名護市源河河源河川, 11. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 名護市源河河源大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; ; 2 exs., 国頭村宇良川, 12. iii. 2009, JF leg.; 11 exs., 国頭村佐手川下流, 12. iii. 2009, JF leg.; 4 exs., 国頭村半地比地川下流, 12. iii. 2009, JF leg.; 15 exs., 名護市大浦大浦川, 13. iii. 2009, JF; 12 exs., 名護市三原ゲヤ川, 13. iii. 2009, JF leg.; 42 exs., 名護市三原三原福地川, 13. iii. 2009, JF leg.; 31 exs., 名護市源河河源大川上流, 14. iii. 2009, JF leg.; 4 exs., 名護市源河河源大川, 14. iii. 2009, JF leg.; 8 exs., 名護市源河河源大川, 16. v. 2007, YK leg.; 33 exs., 名護市大川大浦川, 18. v. 2007, YK leg.; 1 ex., 国頭村宇良宇良川, 17. v. 2007, YK leg.

20. リュウキュウアシナガミゾドロムシ *Stenelmis hayashii* M. SATO, 1999.

【文献記録】SATO (1999)*; 佐藤 (2003); 大桃・高橋 (2007)*

【採集記録】2 exs., 国頭村佐手川下流, 22. v. 2005, MH leg.; 4 ex., 国頭村大國林道比地川上流, 11. ix. 2005, MH leg.; 2 exs., 名護市源河河源大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 国頭村宇良川, 12. iii. 2009, JF leg.; 2 exs., 名護市三原三原福地川, 13. iii. 2009, JF leg.; 13 exs., 名護市源河河源大川上流, 14. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 名護市源河河源大川, 14. iii. 2009, JF leg.; 5 exs., 名護市大川大浦川, 18. v. 2007, YK leg.

21. オキナワミゾドロムシ (アマミミゾドロムシの亜種) *Ordobrevia amamiensis okinawana* NOMURA, 1959

【文献記録】NOMURA (1959)*; SATO (1965*, 1977b); 佐藤 (1985, 1998, 2003); 林・中島 (2005)*; 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】24 exs., 国頭村佐手川下流, 22. v. 2005, MH leg.; 1 ex., 東村宇出那覇, 19-22. v. 2005, MH leg.; 1 ex., 大宜味村平南川下流, 16. xi. 2006, 萩原一貴 leg.; 2 exs., 名護市源河河源大川, 16. v. 2007, YK leg.; 5 exs., 名護市大川大浦川, 18. v. 2007, YK leg.; 1 ex., 国頭村宇良宇良川, 17. v. 2007, YK leg. 49 exs., Taira, Nago City, 1. vi. 2000, Y. SUGIURA leg.; 1 ex., Ohkuni bridge, Ohkuni Rindou, Kunigami Village, 2. vi. 2000, Y. SUGIURA leg.

22. ノムラヒメドロムシ *Nomuraelmis amamiensis* M. SATO, 1964

【文献記録】林・中島 (2005)*; 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】1 ex., 名護市源河河源大川, 14. iii. 2009, JF leg.; 5 exs., 名護市源河河源大川の支流, 16. v. 2007, YK leg.; 2 exs., 源河大川の支流, 18. v. 2007, YK leg.; 2 exs., 名護市大川大浦川, 18. v. 2007, YK leg.

23. マルナガアシドロムシ *Grouvellinus subopacus* NOMURA, 1962

【文献記録】SATO (1977b); 佐藤 (1985, 1998, 2003); 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】1 ex., 名護市源河河源河川, 11. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 名護市源河河源大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 国頭村佐手川下流, 12. iii. 2009, JF leg.; 13 exs., 名護市三原三原福地川, 13. iii. 2009, JF leg.; ; 2 exs., 名護市源河河源大川上流, 14. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 名護市源河河源大川, 14. iii. 2009, JF leg.

24. ナガツヤドロムシ *Zaitzevia elongata* NOMURA, 1962

【文献記録】SATO (1965*, 1977b); 佐藤 (1985, 1998, 2003)+ 大桃・高橋 (2007)*

【採集記録】17 exs., 国頭村佐手川下流, 22. v. 2005, MH leg.; 2 exs., 東村宇出那覇, 19-22. v. 2005, MH leg.; 1 ex., 国頭村大國林道比地川上流, 11. ix. 2005, MH leg.; 13 exs., 東村古島川上流, 15. xi. 2006, 萩原一貴 leg.; 6 exs., 古島川中流, 15. xi. 2006, 萩原 leg.; 12 exs., 古島川下流, 15. xi. 2006, 萩原 leg.; 3 exs., 古島川上流, 14. ii. 2007, 萩原 leg.; 1 ex., 大宜味村平南川上流, 16. xi. 2006, 萩原 leg.; 9 exs., 平南川中流, 16. xi. 2006, 萩原 leg.; 6 exs., 平南川下流, 16. xi. 2006, 萩原 leg.; 9 exs., 平南川下流, 14. ii. 2007, 萩原 leg.; 1 ex., 平南川中流, 14. ii. 2007, 萩原 leg.; 3 exs., 恩納村志嘉座川中流, 24. xi. 2006, 萩原 leg.; 28 exs., 名護市源河河源河川, 11. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 名護市源河河源大川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 4 exs., 国頭村佐手川下流, 12. iii. 2009, JF leg.; 8 exs., 国頭村半地比地川下流, 12. iii. 2009, JF leg.; 13 exs., 名護市大浦大浦川, 13. iii. 2009, JF; 19 exs., 名護市三原三原福地川, 13. iii. 2009, JF leg.; 13 exs., 名護市源河河源大川上流, 14. iii. 2009, JF leg.; 1 ex., 名護市源河河源大川, 14. iii. 2009, JF leg.; 13 exs., 名護市源河河源大川, 16. v. 2007, YK leg.; 14 exs., 名護市大川大浦川, 18. v. 2007, YK leg.; 5 exs., 国頭村宇良宇良川, 17. v. 2007, YK leg.

25. ウエノツヤドロムシ *Urumaelmis uenoi uenoi* (NOMURA, 1961)

【文献記録】林・中島 (2005)*; 大桃・高橋 (2007)*.

【採集記録】 2 exs., 恩納村志嘉座川中流, 24. xi. 2006, 萩原一貴 leg.; 2 exs., 名護市源河源大河川の支流, 11. iii. 2009, JF leg.; 2 exs., 名護市源河源大河川上流, 14. iii. 2009, JF leg.; 3 exs., 名護市源河源大河川, 14. iii. 2009, JF leg.; 8 exs., 名護市源河源大河川の支流, 16. v. 2007, YK leg.; 5exs., 源大河川の支流, 18. v. 2007, YK leg.

チビドロムシ科 Limnichidae

26. メダカチビドロムシ *Acontosceles yoroi* M. SATO, 1966

【文献記録】大桃・高橋 (2007)*.

マルドロムシ科 Georissidae

27. マルドロムシ属の一種 *Georissus* sp.

【文献記録】大桃・高橋 (2007)*.

おわりに

これまでの研究により、沖縄島の河川における水生甲虫相の概要は明らかになっているが、まだ多くの新発見が残されている可能性が高い。島外の研究者が滞在できる日数は限られており、どうしても良い場所・良い時期に集中してしまう。じっくりと腰を据えて調べる必要があり、今後、在住者の手によって本格的な調査が行われることを望みたい。

文 献

- 藤原淳一・山下大輔, 2009. オキナワマルチビガムシの記録. 甲虫ニュース, (166): 11-12.
- GENTILI, E., 1982. *Laccobius* del Vecchio Mondo: Nuove specie e dati faunistici (Coleoptera: Hydrophilidae). Oss. Fis. terr. Mus. Antonio Stoppani Semin. *Archi. Milano* (n.s.), 10 (1981): 31-38.
- 林 成多, 2009. 日本産ヒラタドロムシ科概説. ホシザキグリーン財団研究報告, (12): 35-85.
- 林 成多・中島 淳, 2005. 沖縄島のノムラヒメドロムシ. 甲虫ニュース, (151): 17.
- 林 成多・中島 淳, 2007. 九州・沖縄地方からのヒラタドロムシ科幼虫の記録. 甲虫ニュース, (158): 19-20.
- JÄCH, M. A. and J. A. DIAZ, 1999. The genus *Hydraena* KUGELANN, 1794 (Insecta: Coleoptera: Hydoraenidae) in the Ryukyu Archipelago (Nansei-shoto), Japan. *Ann. Naturhist. Mus. Wien*, 101B: 201-215.
- JÄCH, M. A. and E. MATSUI, 1994. The Japanese species of the genus *Limnebius* (Coleoptera, Hydoraenidae). *Jpn. J. Ent.*, 62(2): 267-274.
- 上手雄貴, 2007. 日本産シジミガムシ属. 昆虫と自然, 42(2): 12-16.
- LEE, C.-F., P.-S. YANG and M. SATO, 1997. The Easat Asian species of the genus *Macroebria* Pic (Coleoptera, Psephenidae, Eubriinae). *Jpn. J. Syst. Ent.*, 3: 129-160.
- LEE, C.-F., P.-S. YANG and M. SATO, 2001. Phylogeny of the genera of Eubrianacinae and description of additional members of *Eubrianax* (Coleoptera: Psephenidae). *Ann. Ent. Soc. Amer.*, 94: 347-362.
- 松井英司, 1990. 琉球列島で採集した水生甲虫類 (2). 北九州の昆蟲, 37(3): 163-170, pl. 19-20.
- 松井英司, 1991. 沖縄本島・石垣島・西表島の水生生甲虫類 (続き). 甲虫ニュース, (95): 12.
- MATSUI, E., 1994. Three new species of the genus *Enochrus* from Japan and Taiwan (Coleoptera: Hydroporophiliidae). *Trans. Shikoku. Ent. Soc.*, 20(3-4): 215-220.
- NAKANE, T., 1952. New or little known Coleoptera from Japan and its adjacent regions, VII. Dasciliidae. *Sci. Rep. Saikyo Univ.*, (Nat. and Lib. Sci.), 1(1): 35-41.
- NAKANE, T., 1982. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent regions. XXXV. *Rep. Fac. Sci., Kagoshima Univ. (Earth Sci. & Biol.)*, (15): 101-111.
- NOMURA, S., 1959. Notes on Japanese Dryopoidea (Coleoptera), II. *Tôhō-Gakuhô, Tokyo*, (9): 33-38, 1 pl.
- 沖縄県, 2005. 「改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ (動物編)」 561 p.
- 大桃定洋・高橋敬一, 2007. 沖縄本島で採集した甲虫類. *OTOSHIBUMI*, (25): 7-23.
- 佐藤正孝, 1977. 日本産ミズスマシ科概説 (2). 甲虫ニュース, (38): 1-2.
- 佐藤正孝, 1985. ゲンゴロウ科・ミズスマシ科・ダルマガムシ科・ガムシ科・ヒラタドロムシ科・ナガドロムシ科・ナガハナノミ科・ドロムシ科・ヒメドロムシ科. 上野俊一ほか (編) 「原色日本甲虫図鑑 II」. 保育社, 大阪.
- 佐藤正孝, 1998. 琉球列島の水生生甲虫類 III. 甲虫ニュース, (121): 7-13.
- 佐藤正孝, 2003. コウチュウ目 (鞘翅目) Coleoptera. 「琉球列島の陸水生物」: 449-466.
- SATO, M., 1965. Dryopoidea of the Ryukyu Archipelago, I. *J. Nagoya Wom. Coll.*, (11): 76-94.
- SATO, M., 1968. Dryopoidea of the Ryukyu Archipelago, II. *J. Nagoya Wom. Coll.*, (14): 125-143.
- SATO, M., 1972. New dytiscid beetles from Japan. *Ann. Zool. Japan*, 45(1): 49-59.
- SATO, M., 1976. Family Psephenidae. Check-list of Coleoptera of Japan, (6): 1-2.
- SATO, M., 1977a. Family Dryopidae. Check-list of Coleoptera of Japan, (9): 1-6.
- SATO, M., 1977b. Family Elminthidae. Check-list of Coleoptera of Japan, (8): 1.

- SATŌ, M., 1983. Family Ptilodactylidae. Check-list of Coleoptera of Japan, (20): 1-5.
 SATŌ, M., 1999. A new *Stenelmis* (Coleoptera, Elmidae) from Ryukyu Islands. *Ent. Rev. Japan*, 54(2): 121-123.
 SATŌ, M. and H. YOSHITOMI, 2004. Discovery of a second representative of the genus *Horelophopsis* (Coleoptera, Hydrophilidae) from the Ryukyu Archipelago, Japan. *Elytra, Tokyo*, 32(1): 41-49.
 吉富博之・佐藤正孝, 2003. 日本産ヒラドロムシ科のチェックリストと覚え書き. 甲虫ニュース, (142): 7-10.
 YOSHITOMI, H., 2005. Systematic revision of the family Scirtidae of Japan, with phylogeny, morphology and bionomics (Insecta: Coleoptera, Scirtoidea). *Monographic Series*, (3): 1-212. Japanese Society of Systematic Entomology.
 YOSHITOMI, H. and J. NAKAJIMA, 2005. A new record of *Ochthebius amami* (Coleoptera, Hydradenidae) from Okinawa-jima Island. *Elytra, Tokyo*, 33(1): 340.

(林: (財)ホシザキグリーン財団)
 (藤原: 神戸大学大学院農学研究科昆虫機能学研究室)
 (上手: 愛媛大学農学部環境昆虫学研究室)

○モグラの巣穴の入口部から採集されたマルヒメゴモクムシ

マルヒメゴモクムシ *Bradycellus fimbriatus* BATES は、外形と色彩の特徴が顕著で同定しやすい種で、本州、四国、九州と中国に分布する。本種は稀な種であるようで、筆者はこれまでに信濃川と渡良瀬川の下流域の河川敷で、増水後に堆積した塵芥中から少数の個体を採集したことがある(未発表)だけであり、本種の本来の生息環境については何の情報も持っていなかった。筆者は最近、貝類研究家の小泉享詳氏から東京都八王子市で採集された本種の標本を恵いただいたが、その採集状況に興味深いものであったので、記録しておきたい。

4 exs., 10. V. 2009. 東京都八王子市裏高尾町(浅川神社敷地内)、小泉享詳採集・芳賀馨保管。

小泉氏によると、採集地点は高尾山北麓の小仏川右岸に位置する浅川神社の敷地で、古い時代に北側の斜面を掘削して造成されたと思われる、幅約 20 m の平坦地である。北に隣接する斜面にはスギ・ヒノキが植栽され、モウソウチクが混生し、地上には枯れたモウソウチクが放置されていた。神社敷地は、舗装されず土壌が露出し、その上に高さ約 30 cm の草本がほぼ全面的に生育していた。本種は社殿のすぐそばの地上に多数認められるモグラの巣穴の入口に堆積した土(いわゆる「モグラ塚」)の表面の小石下から採集された。モグラ塚は柔らかい土壌で形成され、そこだけ草本が生育せず、土壌の上に径 1 cm 前後の小石が複数載っていた。前日の雨のためか、土壌は非常に湿っていた。本種は、小石の下に隠れており、2 頭ずつ同時に採集された。同じ石下には小型のハサミムシ(幼生?)が多数集合しているのが観察されたが、本種はハサミムシを避けるように少し離れた位置にいた。この日小泉氏は、陸貝類を採集するため神社敷地内の地表をくまなく観察したが、本種はモグラ塚以外では発見できなかった。ただし、全てのモグラ塚から本種が発見されたわけではなく、モグラ塚の総数と比較すると、たまに発見できるというくらいの感覚であった。



写真 1. 八王子市裏高尾町のマルヒメゴモクムシ採集環境。

今回報告するように、本種がモグラ塚上の小石下だけから複数採集されたというのは興味深い事実で、本種が特殊な環境に適応している種であることを示唆することかもしれない。

末筆ながら、貴重な標本と、その採集環境に関する詳細な情報を提供して下さった小泉享詳氏(東京都世田谷区)に厚くお礼申しあげる。

(埼玉県さいたま市, 芳賀 馨)

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針 00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6 号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒142-0051 東京都品川区平塚 2 丁目 5 番 8 号

郵便振替 00130-4-21129

電話 (03) 5858-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3784-6464

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

○西表島でセグロツヤテントウダマシを採集

テントウムシダマシ科 Endomychidae の多くは菌類と密接に関係する環境に生息する小型・微小種であり、採集の困難な仲間として知られている(大桃, 1998)。琉球からは14種の記録があるが(東ら, 2002)、分布状況はあまり明らかになっていないようである。

筆者は2009年春に西表島を訪れた際、偶然にもセグロツヤテントウダマシ *Lycoperdina mandarina* GERSTAECKER, 1858 を採集した。琉球からの本種の記録はトカラ列島、粟国島、石垣島に限られているようなので(東ら, 2002)、この場で報告しておきたい。



1♂(写真)1♀, 沖縄県竹富町豊原, 3.IV.2009, 山本周平採集・保管。

夜間、街灯のコンクリート製台座上で静止していた。状況から判断して、おそらく灯火に飛来した個体であろう。ホストはキツネノチャブクロ等のホコリタケ類であるが、採集した街灯付近には見当らなかった。

本種は台湾や中国からも確認されている広域分布種であるので、琉球全域に渡って分布している可能性が高いものと思われる。

末筆になるが、本報告を校閲して下さった丸山宗利博士(九州大学総合博物館)に感謝申し上げます。

参考文献

- 東 清二(監修), 2002. 増補改訂琉球列島産昆虫目録. 570 pp. 沖縄生物学会, 那覇.
 平野幸彦, 2006. セグロツヤテントウダマシは本当にホコリタケにいますか. 神奈川虫報, (154): 39.
 大桃定洋, 1998. 石垣島のテントウムシダマシ科甲虫4種. 月刊むし, (332): 39-40.
 佐々治寛之, 1980. 日本産テントウムシダマシ科概説. 甲

虫ニュース, (51). 1-4.

佐々治寛之, 1985. テントウムシダマシ科. 黒澤良彦ほか, 原色日本甲虫図鑑(III): 237-242, pl. 38-39. 保育社, 大阪.

(九州大学農学部, 山本周平)

○富士山におけるキンオビハナノミの寄主植物について

富士山南斜面の西臼塚において、採取したタンナサワフタギ *Symplocos coreana* (ハイノキ科ハイノキ属)の枯死木を室内で管理していたところ、キンオビハナノミ *Variimorda flavimana* が羽化脱出したので、寄主植物の記録として報告しておきたい。詳細は下記のとおりである。

採取場所: 静岡県富士山西臼塚(標高1,260 m付近)。

採取部位: 直径20 cm, 長さ60 cmほどの枯死した主幹部。

採取年月日: 1996年5月

羽化頭数: 2♀(神奈川県立生命の星・地球博物館保管)。

羽化年月日: 1997年5月(横浜市にて)。

末筆ではあるが、寄主植物の記録として発表を勧められた 神奈川県立生命の星・地球博物館の高桑正敏博士にお礼を申し上げます。

(神奈川県横浜市, 日下部良康)

○「岡山県において幹掃き採集で得られたテントウムシ2種」への訂正

筆者らが報告した「岡山県において幹掃き採集で得られたテントウムシ2種」(末長・奥島, 2009)について、2箇所誤りがあったのでお詫びしてここに訂正する。

19ページ8行目 誤: *Sukunahikona* → 正: *Scymnomorphus*

同上 誤: (BEITTER) → 正: (REITTER)

ムクゲチビテントウの属名には従来 *Sukunahikona* が使われていたが、最近の研究では本属は *Scymnomorphus* 属の新参シノニムとして扱われている(SLIPINSKI and TOMASZEWSKA, 2005)。訂正箇所についてご指摘して下さい、文献を紹介して下さい。埼玉県亀澤洋氏に厚くお礼申し上げます。

引用文献

- SLIPINSKI, A. and W. TOMASZEWSKA, 2005. Revision of the Australian Coccinellidae (Coleoptera). Part 3. Tribe Sukunahikonini. *Australian Journal of Entomology*, (44): 369-384.
 末長晴輝・奥島雄一, 2009. 岡山県において幹掃き採集で得られたテントウムシ2種. 甲虫ニュース, 東京, (165): 19-20.
 (愛媛大学農学部環境昆虫学研究室, 末長晴輝; 倉敷市立自然史博物館, 奥島雄一)

○ベニナガタマムシを千葉県船橋市で採集

ベニナガタマムシ *Agrilus viduus subviduus* KUROSAWA は1957年に新潟県津南町で記載された種で、福島県以南で採集されているが、産地は局限されている(大桃・秋山, 2000)。そして、千葉県では記録がない種である(千葉県資料研究財団, 2003)。今回、筆者らは千葉県船橋市の低地林(標高30 m)に設置したホドロンを誘引剤をとして取り付けたFITトラップで本種を捕獲したので、ここに報告する。なお、データは下記のような。また、同定の労を賜った大桃定洋博士にお礼を申し上げる。

1♀, 船橋市大神保町清掃工場横, 7-22. VII. 2009.



写真 ベニナガタマムシ 7 mm.

参考文献

- 千葉県資料研究財団編, 2003. 千葉県産動物総目録. 千葉県の自然資料, 378 pp.
大桃定洋・秋山黄洋, 2000. 世界のタマムシ図鑑, 341 pp., 月刊むし社, 東京.

(独・森林総合研究所, 横原 寛;
オックスフォード大, 中村 和)

○日本産 *Chondria* 属(テントウダマシ科)は何種か

最近、旧北区のカタログ(2007) Catalogue of Palaearctic Coleoptera 4. (Edited LÖBL & SMETANA) が出版されたが、Endomychidae は Merophysiinae を H. W. RÜKER と I. LÖBL が残りの亜科を W. K. TOMASZEWSKA が担当している。これによると日本産 *Chondria* 属は4種もリストアップされている。すなわち *Chondria lutea* GORHAM, 1887 キイロアシボソテントウダマシと *Chondria agilis* ARROW, 1943, *Chondria longipes* ARROW, 1943, *Chondria tympanizans* ARROW, 1943 である。後の3種が誰によって記録されているか、調べたところ、おかしなことが判明した。*Chondria agilis* を例にとると本種のタイプは IRIAN: New Guinea (NW): Japen I, Mt Baduri, 1,000 ft [305 m], VIII. 1938, L. E. CHEESMAN (BMNH) と記されている。*Chondria longipes* や *Chondria tympanizans* にも Japen I, Mt Baduri, 1,000 ft [305 m] とある。Japen I, Mt Baduri, とはどこか。日本ではなく Dutch New Guinea (Western New Guinea) 今のイリアンジャヤなのである。ここまで来ればおわかりのように Japan と Japen を間違えたのである。筆者もそそっかしいが TOMASZEWSKA も同類なのであろう。

蛇足だが採集者の L. E. CHEESMAN (1881-1969) はイギリスの女性昆虫学者で、1924年からマルケサス、ガラバゴス諸島、ニューギニア、ニューヘブリディーズ諸島など10年以上も各地を調査した。英国の自然史博物館には寄贈された標本があるという。

結論として日本産の *Chondria* 属は *Chondria lutea* GORHAM, 1887 キイロアシボソテントウダマシの1種だけだと思っている。

末筆ではあるが、文献でお世話になった生川展行氏に御礼申し上げる。

参考文献

- ARROW, G. J., 1943. The Endomychid Coleoptera of New Guinea and neighbouring Islands, with some new species. The Annals and Magazine of Natural History, 10(11): 128-136.
STROHECKER, H. F., 1978. The Stenotarsinae of New Guinea and Melanesia (Coleoptera: Endomychidae). Pacific Insects, 19(3-4): 145-164.
TOMASZEWSKA, W. K., 2007. Endomychidae. Catalogue of Palaearctic Coleoptera 4. (Edited LÖBL & SMETANA). pp. 559-568. Apollo Books, Stenstrup.

(小田原市, 平野幸彦)

○福岡県におけるミユキシジミガムシの採集記録とシジミガムシ記録の訂正

ミユキシジミガムシ *Laccobius inopinus* は主に止水域に生息するシジミガムシ属の一種で、国内では本州、四国、九州に分布している (上手, 2007)。著者らはこれまで分布記録のない九州北部の福岡県において、本種を複数個体採集しているののでここに報告する。

なお、井上・中島 (2009) は福岡県で採集したシジミガムシ *L. bedeli* を紹介しているが、その後同所で新たに得られた個体と比較したところ、検した個体の交尾器は破損しており、ミユキシジミガムシの誤同定であることが判明した。ここに訂正するとともに、新たに採集データも示す。

1♂1♀, 11. IV. 2009. (井上・中島 (2009) に掲載した個体); 3♂♂3♀♀, 6. VI. 2009; 1♂2♀♀, 19. VI. 2009; すべて福岡県上毛町下唐原, 著者ら採集・保管。

採集した環境は水田脇に掘られた浅い素掘りの水路で、4 月にはきわめて少なかったものの、6 月には多数の個体が岸際の泥表面や水際を活発に歩行あるいは遊泳している様子を観察した。上手 (2007) によれば本種は西日本で普通とあるが、これまでの筆者らの調査から少なくとも九州北部地域での生息地はきわめて少ないものと考えられる。

末筆ながらシジミガムシ属について種々ご教示いただいた上手雄貴氏 (名古屋市衛生研究所) にこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

引用文献

井上大輔・中島 淳, 2009. 福岡県の水生昆虫図鑑. 株式会社マツモト, 北九州, 195 p.

上手雄貴, 2007. 日本産シジミガムシ属. 昆虫と自然, 42 (2): 12-16.

(九州大学工学研究院, 中島 淳)
(北九州高校, 井上大輔)

○宮古島におけるウバタマコメツキの記録

ウバタマコメツキ *Cryptalaus berus* (CANDÈZE, 1865) は、本州以南の広い範囲に分布することが知られている種であるが、KISHII (1999), 東ら (2002) によると琉球列島の宮古島からの記録はないようである。

筆者の一人、上地は、本年の夏に宮古島で FIT を用い甲虫の調査した際、本種を得ることができたので、ここに記録しておきたい。

1♀, 沖縄県宮古島市大野山林, 30. VII. 2009 (FIT 設置); 5. VIII. 2009 (FIT 回収), 上地泰廣採集。

引用文献

東 清二・屋富祖昌子・金城政勝・林 正美・小濱雄雄・佐々木健志・木村正明・河村 太, 2002. 琉球列島産昆虫目録. XXV+570 pp. 沖縄生物学会。

KISHII, T, 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144.

(宮古島市, 上地泰廣;
東京都世田谷区, 鈴木 互)

○本州のカラカネチビキマワリモドキ

筆者らは、三重県で採集されたカラカネチビキマワリモドキ *Tetragonomenes palpaloides* (NAKANE, 1963) を検することができたので、記録しておきたい。本種は九州南部から琉球にかけて分布することが知られていたが、これまで本州の記録はなかったものと思われる。

2 頭, 三重県多気郡大紀町錦, 24. VII. 2008, 青木淳一採集。

♂ 交尾器を含め、琉球産の本種と区別ができない。本採集地を含む熊野灘沿岸地域の昆虫相については、最近、詳細な報告書 (生川ほか, 2006) が出版されたが、ここにも本種の記録はみられない。

文末ながら、貴重な標本を提供してくださった青木淳一博士に感謝したい。

文 献

生川展行・市橋 甫・天春明吉・市川 太・稲垣政志・官能健次・前川和則・横関秀行, 2006. 熊野灘沿岸照葉樹林の甲虫類, 熊野灘沿岸照葉樹林の昆虫: 63-188.

(三重県津市, 秋田勝己;
大妻女子大学, 益本仁雄)

◇学会の発行物・バックナンバー販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

〒102-0075 東京都千代田区三番町 24-3
三番町 MY ビル 3 階

TEL: 03-6825-1164

FAX: 03-5213-1600

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

甲虫ニュース 第 167 号

発行日 2009 年 9 月 30 日

次号は 2009 年 12 月下旬発行予定

発行者 新里達也

編集者 鈴木 互 (編集長), 長谷川道明, 川島逸郎,
奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会

〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第 2 研究室

電話 03-3364-2311

原稿送付先 (甲虫ニュース) 鈴木 互

〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13

電子メール: wsuzuki@hosei2.ed.jp

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 2009 年度 7,000 円 (一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/index.html>